

が出来たのである。普通の子供はワシントンのやうに初めの過ちを正直に告白することは出来ぬかも知れぬが、併し父母の出やう一つで最初の嘘だけで食ひとめることは出来るであらう。勿論親又は教師としては子供のした悪い事は悪い事と判断してやらねばならないが、併し只一度の過ちの爲にその子供を憎むやうなことがあつてはならぬ。寧ろ悄然と頭を垂れ親の目を避けてゐる子供の憐れな心情に同情せねばならぬ。大人のこの同情こそ子供を悪質の嘘つきに陥らしめることを防ぐ唯一の力である。

過失や虚言はよい事ではないが、併しそれを餘り嚴格に責め無理に白状させて見た所で、小さい子供がその後絶対に同じ過ちを犯さなくなることは不可能である。却つて前の過失の時にひどく責められて居ると、次ぎの過ちの時に子供は一層巧みに之を大人の眼から胡魔化す手段を考案するやうになり、次第に惡の深みに陥つて行く。これは親や教師の謹んで避くべき所である。尙ほ之に關聯して親が子供を疑ひの目で見ることは決してしてはならぬ。子供自身がさほど惡いつもりでは無いのに、大人が勝手に邪推して子供を責めるやうなことは、大なる間違ひである。或は無實の罪を子供に着せて疑つたり叱つたりすることは全く言語同斷のことである。

第八章 子供の宗教的感情

兒童の宗教教育に關しては、本講座に高崎能樹氏の詳細な論述がある。従つてこゝに蛇足を附する要はないと思ふが、話の連絡上主として人智の進歩と宗教的感情との關係の點から子供の宗教心を極く簡単に述べることとする。

第一節 慾と迷

宗教的感情の本能的基礎 宗教的感情も亦人々が個人として、或は集團として自己を維持せんとする本能に基いてゐる。例へば我々が或る決斷をしようとして二つの中のいづれを取るべきかの岐路に立つ時、自分の頭で出来るだけの考へを絞り終つた後は結局「運を天に任せよう」といふ氣持になる、或は岐れ路の所にステツキを立て、見て其の倒れる方向に進んだり、或は賽を振つてみてその數によつて決定したりする。つまり何か自分以外の力にたよつて自分の行く方向をきめようとするのである。或は夜中に淋しい所を歩いてゐて何となく恐しくて仕方がない時に

神が自分を守つて居るから恐いことはないと思へると大分氣持が楽になる。或は病氣が重くなつて命も危いと思はれる時、生の執着から心に死の恐れと煩悶とが起るが、かやうな時に自分一人もがいても致方のない人間の運命を觀じ、すべてが神の心に従ふのみと諦めると、著しく心の安らかさを覺える。すべて何かの危機に臨んで自己の弱きことを感じ若しくは破滅の近きを知る時には、何か自己以上の力、超人間的な神や佛といふものに縋らすには居られないのが自然である。恰も嬰兒が母親の膝を離れては不安で眠られないのと同じことである。理智的に考へると神は無いとかそんなものに頼るのは馬鹿げたことだと思ふけれども、我々の心の奥の方にはかういふ感情が強くあつて、決して理智の力で之を制することは出来ない。此の如く自己の弱きを感じて超越的な力に縋り度いと思ふ氣持が即ち宗教心の初歩であると思はれる。即ち恐ろしい現實に直面して自分の力ではどうにも仕方がなく、或は自己の生命をも脅かされるやうな時に、何者かにとより縋つて此の危険から免れ度いといふ自己保存の願望が、宗教心の根底をなすのである。このやうな氣持のまゝでは幼稚な一時的な願望に過ぎないが、人類は長い年月の間の經驗をする中に、此の願望を神といふ絶對的觀念に結びつけ、文化的な價值ある宗教的感情を形成するに至つたのである。

知的發達の幼稚な野蠻人は、自己の周圍に起る種々な自然現象例へば天災地變とか人間の死とかに對して、或は激しい恐怖を感じ或は漠然たる不安を感じるに違ひない。そして何とかしてかういふ恐れから免れ度いと願ふであらう。彼等の幼稚な頭では、こんな恐い事の起るのは樹木や岩石や太陽や風や雨や其他の自然物が、人間と同じ心をもつてゐて、時に應じて怒つて禍を人に與へるのだと考へたであらう。それで斯かる自然物の前に跪いて之を禮拜し更にそれを祀る原始的な宗教が起つて來た。自然物が人間の様な心を有し、氣隨氣儘に振舞ひ、又種々な魔力を有して災害を人間に與へると考へて、自然物を拜むのを自然崇拜といひ、斯かる活動が物體や肉體から獨立に存在するものとしてそれを拜むのを靈魂崇拜といふ。

然るに他の一方に於いて自然は決して人間に禍するのみではなく、又大いに恵みを與へてくれる事も多くある。恐しい嵐の後には太陽が輝き、苦しい大旱魃の後には慈雨が來る。加之大體に於いて五風十雨その時を得て、春種をまけば秋に收穫があり、海には魚があり山には獸があつて我々の食物を與へてくれる。さういふ自然の恩恵に對する人々の温い感謝の念が亦次第に宗教的感情

の中で勢力を占めるに至つた。加之自然現象の猛威に恐れて之を崇拜し之を祀ることなども、其の中に自ら神の恐しい力を和げ憫みを起させ得るといふ希望が多少あるのであつて、それによつて神に接近し神の助けを求めるといふ願望が存する。宗教的感情が高等になると、この溫情的方面が優勢になつて、神を讃仰し之に憑依し、神に守られてゐるといふ大安心の感情が著しくなる。同時に人の智も一層進んでゐるので神の觀念も大分變つてくる。殊に自然界の秩序や規則性を發見すると、神はこの規則性や秩序を司るものだと考へるやうになる。それが進むと神は道德的な秩序をも司るものと考へるやうになる。そこに因果應報や輪回轉生等の考へも加はつて來て、宗教は益々發達し、人々は一層強く神を崇めその慈悲や啓示を希ふやうになる。

次に神に對する宗教心は次第に社會生活と結びついて其の社會の主權者の統制力を強める様になる。神の名に於いて主權者の命令や禁止がされると人々は喜んで之を守り随つてその社會の結合は一層堅くなり、それが社會的道德感情と結びついて、神を崇め人の和を結ぶ複雑な宗教的感情に進展するに至る。かくして人智の進歩に伴ひ、神に對する觀念は種々合理化され、神學や宗教哲學が盛んになつて、人々の宗教的感情は素朴な本能的なものから理性的なものに變つてくるが

究極に於いて超越的な威力に信憑し之によつて安心立命を得るといふ點は少しも變る事はない。

このやうに宗教的感情の起原は自己維持の本能にあるのであるが、他面から見ると、この自己維持の本能があるために人は恐れたり迷つたりするわけである。そこで人が恐れや迷ひを無くするには、自己維持の本能即ち我慾我執から解放されなければならぬといふことが、多くの宗教家によつて説かれるに至つた。原始的な時代には、只神に祈りその憐れみを求めるのみで救はれたといふ感情を持ち得たであらうが、人が理性的になるに隨つて、そんな單純なことで救はれた氣持になれないやうになる。即ち本能的な願望を精神的に醇化して眞の救ひの道を見出さなければならぬやうになり、かくして種々複雑なる宗教的感情が發生するに至るのである。同じ『有難い』といふ感情でも、野蠻人の場合には極めて單純で、或る危険から免れたとか或る利益を得たとかいふ一つ一つの事毎に感ずる事が出来るが、文化人に於いては餘程複雑で、相當に修養を積まないと一飯一宿に有難いと感じることが出来なくなつてゐる。その代り文化人の感ずる有難さは野蠻人のに比すれば非常に人間としての深味を生じてゐる。かくして人間の知能が進む程、宗教的教育も次第に大切となるのである。

現代生活と宗教心 恐しさや煩悶や迷ひや自分の力の到底及ばない危機に立つ事などは、

人間が如何に進歩しても無くなるものではない。むしろ人智が進み生活環境が複雑になり人々の欲求も多くなればなるほど此等のものは益々多くなると言はれる。然るに人智の進むにつれて、人は單純に神を信じたり神に祈つたりすることが出來ず、種々な煩悶や迷ひをなるべく合理的に解決しようとする。知は人間が其他の動物に比べて最も多く所有する所の最も尊い武器である。知力の低かつた原始人は風雨雷電のやうなものでも不可思議と思ひ神の怒りだとして恐れ迷つたのであるが、知力の進んだ現代では自然現象の因果關係から起る當然な事となつて左程著しい感動も起きなくなつた。即ち文化の進むと共に自然の不思議も驚異も神秘も次第に消失して行つて、人間はむしろ此等の自然現象を支配し利用する迄に至つた。風を用ひて船を走らし雨を灌溉に役立て雷電を捕へて燈火を點じ動力を起すやうになつた。かくて次第に人為的な文化が榮え、人は自然から遠ざかつて自分達の作つた人工的な環境に住むに至り、人は自分の智を恃み、其の産物たる科學を誇りとするものが強くなつた。

併し更によく考へると如何に人の知力が進んでも其の知り得る範圍は宇宙の宏大無邊なるに比すれば眞に九牛の一毛にも過ぎない。現代の科學の進歩は誠に驚嘆すべきものがあるけれども、その反面に又現代の科學の到底解釋し得ない事柄は無數にある。古今の學者の中で殆んど匹敵するものなしといはれたニュートンでさへ、自分は茫漠たる眞理の海の濱邊で二三の貝殻を拾つたに過ぎないと云つたではないか。之は決して彼の誇張では無くて其の心からの告白であらう。實際學者の研究が進めば進むほど、自己の研究の到らぬ領域の廣漠なる事を知るものであるからである。むしろ人の知識が進むほど人間の迷ひは益々多くなり複雑になり、智に驕り神を忘れた人間は更に新しい意味で神の怒りに觸れなければならなくなる。科學の極めて幼稚だつた時代には、科學によつて天地萬有の事を悉く解決し得ると考へたが、其科學が進歩するに隨つてそれは果敢ない空頼みであることが分り、未開人の祈りを嘲笑した文化人は、自分自身知に對する迷信に捉はれるやうになつた。人智は益々進歩するけれども其の進歩には終りのあるものではない。故に古人も『人多く知る程多く迷ふ』とも『己れの無智を知るに勝る知はない』とも言つてゐる。現代人が失はれた宗教的感情を取り戻し、迷ひを打破して眞の大安心を得るには、先づ知の過信から目覺めねばならない。

かくて知の過信から目ざめた人には世の中がまるで違つた現はれ方をする。今まで『自分』の蔭になつて全然蔽はれてゐた世界が感得される様になり、自分の得たものが與へられたものとなり、存在するものが作られたものと感ぜられ、自分の求めるものが報いられたものとなる。さうした世界を感得してこそ感謝も讃仰も自制も恩惠の感も十分な内容をもつて現代人の宗教的感情が蘇つて来る。知を過信し知に驕ることを止めて知を働かす所に、現代人に對して敬虔の戸が開かれるのである。

第二節 子供と宗教心

子供の宗教教育の意義

幼少な子供には宗教は無用である。何故ならば子供は親の保護の下に其の暖い慈愛に生まれ、我儘をいひながら大船に乗つたやうな安穩な生活をしてゐるからである。困つた時や迷つた時は直ちに親の膝下に走ればよい。親より外の神などに救ひを求める必要は少しもない。即ち幼い子供にとつては親は神と同じやうに偉いのである。或る心理學者の報告によると、親よりも神の方が完全なのだと教へられた或る子供が之を非常に憤慨し、機會あ

る毎に神の落度を見つけようと努力したといふことである。

斯くの如くにして普通にいふ宗教は幼い子供には全く要らないものであるが、併し宗教的な感情の涵養は幼い子供の教育に於いても極めて大切である。前章に於いて述べた如く、子供が善悪の別を知るには權威が必要不可欠であるが、この權威に對する感の子供の生活全體に押しひろめ、しかも窮屈な權威ではなくして子供の讃仰する所の權威とすることは、子供の感情を清らかにし豊潤にさせるに頗る必要なことである。而してこれはとりも直さず宗教的感情の涵養に外ならぬ。子供が善に従ひ悪を恐れる心の底に、瑞々しい生活の喜びを湛へるのは、宗教的感情によらねばならない。喜んで善をなすやうになるのも、一木一草に愛好の心を抱くのも、一つの菓子一本の鉛筆をも粗末にしないのも、皆これ宗教的感情に基くのである。即ち子供の宗教教育は、子供を宗教人にすることではなく、恩惠、愛、感謝、崇敬等の感情を物に觸れ折に臨んで養成し、清純な感情的素地を子供に得しめることにある。既に屢々いつたやうに子供の教育が伸びんとする生活を萎縮せしめるやうなものであるならば、それは根本的な誤りである。子供の宗教教育に於いても同様で子供の生活力は十分に旺盛にしなければならぬ。又その當然の欲求は十分に満足せしめ

てやらねばならぬ。かくした上で其の旺盛な生活力や欲求を基礎として宗教的感情を養ふのでなければ眞に此の感情を子供に抱かしめる事は出来ない。己れの當然の欲望を十分に満たされない子供は「神様はケチだ」とか「神様は嘘つきだ」といふ気持ちになることがよくある。これは子供の宗教的教育に於いて特に留意すべき點である。

子供の宗教的感情涵養の機會

上に述べたやうに子供の生活そのものが恰かも大人が宗教に救はれた時と同じやうに大安心を得てゐる生活なのであるから、宗教的感情は子供の生活の凡ゆる機會を捉へて涵養することが出来る。それは即ち子供を自分の足もとに氣をつけさせ、何の御蔭でかういふ安堵の生活をなし得るかを知らせればよいわけである。併し此の際最も注意すべきことは、本來子供は一方では自我感が十分強かるべきもので、又下手に子供の自尊心を抑へるやうなことがあると徒らに子供を怒らせ反抗せしめるのみであるといふことである。例へば子供に向つて『お前はつまらぬ者であるのにさうして安らかに生きて行けるのは父母や神佛の御蔭だ』などといふと、子供は大いに憤慨して、自分の偉いことを見せようと思つて、凡そ親の期待した所とは違つた天邪鬼あまのじやくになつてしまふ。子供の宗教的感情の涵養はたゞ言葉で言つて聞かせ

るだけでは出来るものではない。殊に青春期になると構成を侮り之に反抗するやうな氣持に満ちて居るから、親や教師が言葉で如何に説明しても無駄である。子供の宗教的感情を養成するには、子供が崇敬すべき偉いものゝ偉さを外から強制することなく、子供自身にその偉さの前に自然と頭の下がるやうな氣持にならしめることが大切である。出来るならば子供が當り前だと思つてゐる事柄の中から恩を感じ得せしめるのが一番望ましいことであるが、それは甚だ困難であるので、先づ子供の心に何か偉い勝れた崇高なものに對する感動を覚えしめ、それから卑近な事柄の方に及ぼして來るのがよい。

自然界は子供の宗教心にとつては極めて大きな力となる。古來山河の秀でた國には偉人が多いといはれ、又偉大な宗教家も多くは高山幽谷深林廣野の中で靈感に觸れたといはれて居る。子供の心も自然の雄大崇高な姿に接すると一種不可思議な神秘的な感動を受ける。洋々たる大海、巍峨たる山嶽、輝ける日月、去來する白雲、一望際涯なき平野、或は風雨、雷電、虹、御來光等の不思議な現象に接すると、何人も驚嘆、恐怖、讚仰の感に打たれざるを得ぬ。子供の心に對しても此等の自然現象は深い感動を與へ子供の精神生活を向上せしめ、知らず識らずの裡に宗教的感情

が養はれるに至る。殊に此れ等の雄大神秘なる自然の姿を目のあたり見ながら、自然の尊さを語る父母教師の話に耳を傾ける時、子供の心には自然に對する讃仰と感謝とが油然而として湧き出づるであらう。

偉人の話を子供に時々聞かせることも亦其の心を向上せしめるものである。英雄、志士、仁人等の一言一行は凡て子供の範となすべく、子供の心はかゝる偉人に對して強く感激し心服する。又偉人の像を拜しその墓に詣でることは大なる感動を與へる。或は自分と同じ名前の偉人や自分の住んでゐる土地に關係のある偉人に對しては特別に尊崇の念が強く起る。

これと同様に宗教の教典や教祖の言行録、或は宗教的な文學等を物語りとして子供に聞かせることは、知らず識らずの間に子供の心に宗教的感情を起させる。或は我が國の歴史や人類の歴史をお話にしてきかせ、我が國の精神の美しさや人類進歩の偉大なる跡を辿らせることも、亦これと同じやうな効果がある。

『想中おもひにあれば色外に顯はる』、子供の心の中に宗教的な感情が生じて來れば自づとその坐臥進退の舉動も變つて來る。併し逆に『居は氣を移す』といふ方面も確かにある。餘り窮屈な形式や面

倒な作法に捉はれる必要はないが、子供の周圍にある人々の信仰的態度は直ちに子供に移されるものであるから、毎日神棚や佛壇に拜禮し、一家打ち揃うて食事する時には必ず感謝の挨拶を述べ祖先や祖父母などの命日には必ず禮服を着て展墓するといふやうな態度が、子供の心に敬虔、感謝、尊崇の情を生ぜしめることはいふまでもない。

神といふ觀念が子供に出来るのは相當の年齢に達してからであるが、周圍の人々の態度によつて、子供は神の何者であるかは直ぐに分らなくても、そこに漠然と尊い或る物に對する感情が次第に養成せられる。換言すれば神に對する子供の觀念は幼稚であつても、神を恐れ神に感謝し神を讃へる感情は、生活のあらゆる部分に浸透して、戒を持ち歡喜に溢れる生活の基調となるのである。斯くの如くにして子供の宗教的教育の基礎は家庭の生活にあり、父母の信仰的態度に存するのである。

第九章 子供の藝術的感情

第一節 藝術的な楽しみ

藝術の心理的起原 子供に於ける藝術的感情を研究する前に、先づ一般に藝術が如何にして人間社會に發生したかを簡單に考へて見よう。

藝術を心理的に見ると、即ち人間の如何なる心理作用から藝術が起つて來たかを考へると、一言にいへば人々の感興の表出が集團的に一つの型にはまり、各人はその型に従つて心を樂しませたことにあると言へよう。即ち藝術は一種の集團的遊戯ともいひ得るものから發達して來たのである。

今之を詳しく詳しく説明しよう。人間の心に何等かの感動が起れば自然に之が身體の運動となつて現はれる。例へば嬉しい時は自然に微笑まれ手が躍り足が跳ねるが如き、又怒つた時には顔が赤くなり齒がみをし拳を握り或は相手を打たうとするが如き類である。斯様な心の表現的運動

が藝術的衝動の基礎であると思はれる。大抵の民族で最初に現はれた藝術は舞踊であるといはれてゐるが、踊りは心の表現的衝動が直接に身體的に現はれるのであるから、之は實に當然のことと思はれる。

併しながら單に一人の人が嬉しいから跳ね、楽しいから喚くといふ如き個人的な表出から、直ちに藝術が生じたと考へるわけにはゆかぬ。何處の民族にも傳はつてゐる土俗藝術は、決してたゞ個人的な楽しみを表はしたのではなく、人々が一つの集團を作つて一緒に楽しみを共にしたものである。即ち人々が相共に踊り、相共に歌つたことから藝術は生じてゐる。尤も今日では藝術が非常に個人的になり、むしろ個人的な特質の濃いもの程尊ばれる傾向にあるが、それでも他人に何の藝術的感動も起さないものは藝術品ではない。之が藝術の最も根本的な點である。斯くの如く藝術の發生は決して單に個人的なものでなく、集團或は社會の共有の踊りや歌などとなつて、其の社會を作る各個人がそれに従つて一緒に踊り歌つた所から始まると思はれる。即ち共感又は同情の作用により、一人の感情が他の人々にも傳はり、多人數の感情は更に強く他の人々にも感染するといふこと、即ち感情の共鳴ともいふべきことが藝術的感情の根底にある。かくしてそ

の社會の皆の人々が感興を共にし得るやうなものが藝術となつたのであらう。

何故に人には藝術が入用であるか。之は難しい問題である。道德や宗教はともかく實際生活に役立ち實用的な意義をもつてゐるが、藝術にはかゝる實用的な意義は極めて少い。強ひていへば藝術は社會的に必要なので、社會を形づくる人々の感動を各勝手にさせて置かぬやう一定の統一を保つために入用だといはれるかも知れぬ。併し藝術をかやうに功利的に考へるよりも、むしろ感情を外に現はさずには居れない衝動と而も之を皆と一緒に楽しみたいと思ふ集團的衝動との二つに基いて自然に發生したものと見るべきであらう。

かくして藝術の起原は遊戯と密接な關係をもつことを知り得るであらう。遊戯は如何なるもので又如何にして發生したかについては種々な説があるが、要するに活動することそのことが愉快である爲めにする活動であるといへやう。例へば子どもが相撲をとるのは別に之を人に見せて報酬を貰はうといふので無く、相撲をとることそれ自身が愉快なのである。又我々が日曜日に釣りにゆくのは別に釣つた魚を賣つて利益を得るためで無く、釣りその事が面白いのである。即ち他の目的の爲めにやる活動でなくして活動そのものが目的となつて居るのを遊戯といふのである。而

して遊戯の發生には二つの経路があつて、心身の力が充滿して之が何といふ目的はなくてもどうしても外に顯はれずには居れない衝動に驅られて生ずるものと、初めは何か目的あり意義あることであつたものが、何度も繰返す中に初めの意義を失つて活動そのものが楽しみになつた場合とである。健康な元氣のよい子供が少しの間もちつとして居ずに跳ね廻るのが前者であり、初めは怒つて相手の頭を撲り相手からも撲り返してゐる中にいつの間にかそれが遊びになる如きは後者である。藝術でも同様に、内に湧起つた感動を表現して藝術となるものと、實際生活に意義のあつたものが、實用性を失つて藝術化するものとある。遊戯では何れの場合にも活動自體を楽しむのが本質であるが、藝術の喜びも之と同様で、内に湛へられた感激、或は突然思ひ浮んだ考への閃きなどを、何等かの形で外に表はすことそれ自身が楽しみであり、或は美しいもの立派なものを鑑賞して心を樂しますそのことが楽しみである。故に藝術家は、自分の作品が如何なる利益を他人に與へるかなどいふことは考へない。只自分の心の感動をそのまま外に表はさうとする。又之を鑑賞する者も、それによつて心に感激を覺えさへすればよいので、何の爲めにといふやうなことはない。けれどもこの何の爲めに考へない藝術家の感動に、生命の底に觸れた或る力を湛へること

があり、之が立派な藝術作品となつてあらはれた時、之を鑑賞する人の心はこの作品によつて其の水準を高められ、新しい境地を啓發される。實用上何の價値もないやうに見える藝術的天才を社會が要望する所以はこゝにある。かくして藝術に於いて個人的色彩が次第に濃厚になり同時に人々の人生觀や世界觀と緊密な關係をもつに至るのである。

併しながら前にも云つたやうに藝術の根本は、それによつて社會の多くの人々が感動を共にする事にある。社會の大衆、殊に日々の生存競争に疲れてゐる人々の間には、その心を樂しませるために其の毎日の仕事や或は時々に行はれる種々の行事、例へば祝ひとか祭りとかいふやうなものの中から、次第に實用性が脱化して遊戯に近づいて來た藝術が發生した。これが即ち郷土藝術といふ所のものである。これは大衆の生活から自ら發生したものであるだけに、大衆の何人にも喜ばれる性質を持つて居るが、同時に比較的低級で野趣を帯びて居るものが多い。そこで一方には藝術が個性化し、他方には文化の向上するにつれて人々は次第に郷土藝術を飽き足らず思ひ、今少し高尚な或は刺戟の多い藝術を求めるやうになる。斯くの如くにして一方には高級なる藝術的作品が偉大なる天才によつて創作せられ、他方には低級な享樂心のみを満足させる卑俗な藝術が多くの

群小藝術家によつて盛んに作り出さるゝに至るのである。

藝術の價値 藝術の發生に際しては『何のために』といふ實用的な目的を有しなかつたのであるけれども、文化の進歩と共に自然にそこに實用上殊に教育上の利害が生じ來たことは特に注意を要する點である。

藝術が有用なのは、それが人の心に樂しみを與へ、人生に潤ひを齎らす點にある。勿論専門の藝術家、即ち藝術の奥に入り、藝術のみを己が生命としてゐる特殊の人々にとつては、藝術はそんな生ぬるいものではあるまいが、併しそれは藝術家としての特殊の價値で決して一般の人々に當てはまることではない。この點について近頃の子供の藝術教育に於いても時々誤られてゐるやうに思はれる。子供の藝術教育は決してすべての子供を藝術家にしようといふのではない。少數な特殊の天才は特別に保護してその藝術的才能を十分に發揮せしめる必要はあるけれども、大多數の子供には只藝術を愛し藝術的感情によつて心を樂しませ、又藝術的表現を多少學習して、之によつて感情の表現を或る程度まで洗練することが出來ればよいのである。子供の生活は心身ともにはちぎれるやうな生活力に充ちて居り、それが自然に遊戯となり藝術となつて現はれる。彼

等は其の自然の元氣にまかせて、踊り歌ひ或は劇の眞似をし又は繪を描き粘土細工をやる。そしてそれがなく上手であり藝術的の匂ひの頗る高いものも少くない。藝術家の目から見ればこの時期こそ藝術的に訓練すべき時であり天才を伸ばすべき時であると思はれるかもしれない。確かにこの時期に隠れたる天才が見出される事が屢々あるので、その發見を心がける事も大いに大事ではあるが、併しかゝる天才はいつでも極めて少數であつて、大多數のものはこの時期に藝術を愛するのは只の遊戯たるに過ぎぬ。子供をよき藝術に接近せしめて、その香り高い感情に觸れさせるのは頗るよい事であるが、子供の藝術を餘り高く買被つて、天稟の無いものに藝術家としての教育を強ひ、長い年月の間苦しめた後に結局之を放棄してしまふやうにならせることは大なる罪惡である。

文化が進むに従ひ、自然發生的な純朴な藝術が失はれて、その代りに興味本位の感覺的な低級な似而非藝術が流行して來ることは、文化の自己中毒として最も寒心すべきものゝ一つである。而も此等の低級藝術は、人々の本能的欲求や享樂性を巧みに刺戟するので、その蔓延力は制し難いものがある。而もそれが大人の世界に流行すれば自ら子供も之をまねし、そのため子供の感情は

卑俗となり、情弱の風に染み、又多くの性的刺戟を受けて早熟となる。此等の低級なる頹廢的藝術を社會から驅逐することは、子供の藝術的感情の教育に甚だ必要である。

娛樂と藝術 藝術の起原は遊戯と非常に共通してゐる。子供の遊戯が一方では娛樂に赴き他方では仕事へ進む如く、藝術の起原にも、高級な藝術と娛樂との二つの方向に向ふ要因が存してゐた。

即ち、藝術はそれによつて人の心を樂しますことゝ、人々の興味を高い水準に引上げ、人々の表現を洗練することゝの二つが含まれてゐる。もし樂しみの方向一方に向ふならば、藝術は人々の本能的満足にひきづられて娛樂化する。藝術には人を藝術の高い水準にひきつけること、即ち美の感情を高めることが、必要な因子となつてゐる。

人々が美を好むのは、表現せずには居られない衝動と同様、本能的なものである。只本能は何か欲求の目的をもつてゐるが、美を好むのはさういふ本能的欲求から脱化してゐる。フロイド等の精神分析學では美とは性慾の象徴であるとし、我々の美感情は生殖器を中心として起り之から次第に轉化脱化したものだといふ。草木の美しい花は草木の生殖器であり、鳥や魚の色が美しく

なるのは性的誘因であり、又虫や鳴禽の美しい聲もさういふ役割をもつてゐる。人間でも裝飾の起原には性的刺戟と關聯するものも少くない。さういふわけで、美の感情と性慾とはかなり關係の深いものであるが、すべての美がそんなものだとはいはれない。我々の慾求は、初めは本能に基いてゐても、しまひには、本能から脱化して對象そのものを愛好するといふ風に變つてくる。食慾のために探してゐた草木を栽培して之を樂しみ、初めは性慾的に見てゐた異性の裸體を、後には只美的に鑑賞するといふ様に、美的感情は本能の脱化であるが、必ずしも性慾にのみ限つたものではない。フロイド等は、性慾を非常に廣い意味で用ひ、對象にひきつけられる慾求を皆性慾的なものとしてゐるから、さういふことをいふのである。

美を好むのは、このやうに本能の脱化によるもので、二次的な本能といつてもよいが、それが原始的本能の満足に近い程低い美であり、精神的に高い程高い美である。精神的に高いといふ事は、屢々いふ如く、本能を否定するのではなく、一層調和統制のとれた本能の協働を意味するのであるから、低い美は低い生活に伴ひ、高い美は高い生活に伴ふこととなる。従つて生活が向上し精神的に進歩する程高い美を愛するやうになる。その場合の藝術的感情は原始的本能の慾求に

伴ふやうなものではなく、精神的水準に相當した二次的のものであるが、併しその精神的慾求に於いて捉へられるものは藝術的に高められた實相であり、その感動の強さや興奮の満足に伴ふ樂しみは一般感情と同様に強い身體的效果をもつてゐる。従つてこの感動によつて心を樂しますことが出来る。

娛樂は之に反し、美の向上がない。全く遊戯と同様で、只刺戟を求め之によつて興奮し、興奮を外に出して樂しむのである。故にそれは、直接食慾や性慾の満足を目指すか、或は遊戯的に溜つてゐるエネルギーを發散させるか、ともかく享樂一方に偏して、藝術的感情を通して實在を見るといふやうな慾求は少しもないのである。

従つて娛樂と藝術では効果を狙ふ手段に於いて非常な相違がある。兩者とも人に強い感情を起させ興奮を覚えしめるものであるが、藝術では極めて平凡な日常の事柄の中から、よく實在の深奥を穿つたありかた即ち實相を捉へ、之を鑑賞するもの、胸に共鳴せしめて感動を起さす。強い感動を與へるのは、實相の深さとその表現の効果とにある。然るに娛樂では、たゞ強い興奮さへ與へればいゝのであるから、徒らに刺戟を強くし、煽情的挑發的となり、或は危險感に伴ふ戰慄

を與へるやうなものとなる。適當な娯樂は決して悪いものではないが、之がすぐ過度になり易く、過度になると種々な弊害を生じ易い。

第二節 子供と藝術

兒童藝術

藝術が一般の大人にとつて必要なが如く少年青年にとつても亦極めて必要な事はいふまでもない。心身の元氣が溢れ慾望は盛んで暫くも靜止することの出来ない彼等に、たゞ興味のない現實的な仕事たとへば學校の勉強とか或は精神的又は肉體的の勞働とかいふ方面の仕事をさせて置いたら、彼等は忽ち之に倦き何か心を樂しますものを求め、それが與へられなければ彼等の元氣のはけ口を頗る野蠻な事柄たとへば喧嘩、口論、飲酒、勝負事、遊蕩等の、殺伐或は淫猥な快樂を求むるに至り、人間は原始人又は野獸の境涯に後もどりするであらう。現在風儀の紊亂は都會よりも却つて田舎に多いといはれてゐるが、その主なる原因は恐らく田舎には都會に見るが如き種々の娯樂が乏しいからである。或る村では長年行はれて居た盆踊りを禁止したら忽ち村の青年の風儀が紊れたので、あはて、此の禁止を解いたといふ話もある。斯様なわけで子供

や青年にはどうしても心の娛しみや慰みを與へなければならぬのであるが、併し大人と少年青年との間には娯樂又は藝術の觀賞眼が違つて居るから、少年青年は大人から見ると幼稚な小兒らしい娛しみを求め、大人にとつて藝術的に價値の高いものは多くは少年青年には喜ばれない。そこで少年青年に與へんが爲めに、一方に於いては藝術的であつて而も子供や青年の心に十分の満足を與へるもの、即ち子供や青年の爲めの藝術が必要となる。

併し大人の場合でもさうであるが、子供や青年に於いては尙更、たゞ藝術によつてのみ彼等の生活の娛しみが與へられると思つてはならぬ。藝術に於ける二面の意義、即ち樂しみと教養とは子供や青年では特にはつきりさせて置かねばならぬ。子供の眞の樂しみは本能的な欲求、殊に食慾と遊びの欲求とを十分に満足せしむる事にあり、青年になると此の上に性慾的なものが加はつて來る。此の如き娛しみを藝術的な粉飾によつて間接的に満足さす事も、兒童や青年の藝術に於いては考へられねばならぬが、それは藝術としては低級なものであつて、動もすれば子供に媚びる似而非藝術となり易い。つまり藝術によつて子供や青年の娛しみを悉く満足させようとするれば、結局藝術が卑俗に陥り易い。故に此の二つを明かに分けて一方に生活的な満足を與へつゝ他方に藝術

的な楽しみに目覺めさすのが兒童藝術の大切な點である。

兒童藝術の事は必ずしも事新しい要求ではなく、随分昔から種々の試みがなされてゐる。少年のための文學は各國共に随分盛んに發達して居り、最近更に彼等の爲めの映畫も相當に作られ、又他方には彼等の創作心を指導する事に大いに努力もせられて居り、中には相當立派な結果を擧げたものも少くない。就中少年文學や青年文學には不朽の傑作と稱すべきものが相當にある事は何人も知つて居ることである。併し又その中には大人の感情を子供に強ひたり、或は餘りに教育的に過ぎて人爲的の所が多く、少しも子供心に感興を起させなかつたり、或は反對に子供の興味に媚び過ぎて全然啓發的な刺戟を缺いてゐたりして、子供の満足と教育との連りがうまく行かなかつたものも亦極めて多い。教育的に無價値な漫畫や滑稽物語が子供に喜ばれ、子供の教訓になるやうに考へられた作品は見向きもされず、學校の唱歌は嫌はれて坊間の卑俗な流行唄が盛んに唱はれるといふやうな事は、歎かましいが事實である。

此處に考へなければならぬのは鑑賞と創作との關係である。普通には鑑賞は容易で何人にも或る程度までは出来るが、創作は困難で専門の藝術家のみがなし得ると考へられてゐる。ピアノを

自分で弾けなくても、ピアノの音楽を好み演奏者の出來榮えや曲のよし悪しを批評する事は出来る。又自分では繪が描けなくても繪を見て楽しみ繪に對する批評眼を具へて居る人は多い。斯くの如くに藝術の鑑賞と創作とは別々の事と普通には考へられてゐる。藝術が甚だ専門的になると、一般の素人は創作はなし得ず只之を鑑賞する喜びしか持ち得ないと一般に考へられて居る。

併しながら子供の場合には之とは可成り趣を異にし、今少し原始的な状態で考へねばならぬ。本來藝術上の創作といふことは、藝術家の魂に觸れ來たつた實相をその感動の裡に表現することである。この表現が巧妙に出来るか或は拙劣になるかは其の人の技術の修練によつて定まるのであるが、藝術の眞の面白い所は、寧ろ藝術家の魂に觸れ來たつた實相とそれに伴ふ感動とに存する。然るに一般の素人たちが藝術を鑑賞する時、例へば繪を見たり詩を讀む時、藝術家の魂に觸れた所のものが自分の魂にも觸れる事を感じ、藝術家の感じたと同じ感動を味はふのが即ち鑑賞であるとするれば、創作と鑑賞との心理は極めて密接に相通じたもので、鑑賞者は藝術家を通じて實相に觸れてゐるとはいへ、自分自らもこの實相に對する感受性をもつて居ればこそ眞の鑑賞をなし得るわけである。斯く見來たれば結局の本質に於いては鑑賞と創作とは同じ過程であり、鑑賞家はた

と藝術的表現の練習を積んでゐない藝術家だといひ得るであらう。

子供は繪畫や音楽を十分に練習して居らず其の描く繪やその口ずさむ唱歌などは極めて幼稚で拙である。併し子供もやはり實相に觸れて繪や音楽として表現され得る感動を有し或は繪を見、音楽を聞いて、自づと手が躍り足が動かすには居れない感動を覺える能力をもつてゐる。殊に世間の現實な事柄に煩はされることの少い子供は、寧ろ大人よりも遙かに多く遙かに新鮮な實相を捉へることが出来るであらう。之が子供の藝術の源泉となる。かくして子供に於いては鑑賞と創作とは同一であり、子供が鑑賞して楽しいと思ふものは同時に幼稚ながら自分の出來得る範圍に於いて之を表現し藝術を創作するのである。子供の繪畫や手工品などは其の描寫製作の技術は拙劣であつても、その中に驚くべき藝術的な何物かあり、之が觀る人の魂を打つことが少くない。専門の藝術家さへ子供の斯くの如き幼稚なる作品に學ばねばならぬ事が多くある。つまり子どももやはり天地の美に觸れて之に感動する能力をそなへて居り、これを率直に表現するが爲めである。

藝術的表現をその特殊の専門的な仕方て訓練することは藝術家の訓練であつて、凡ての子供に

必要ではない。併し子供が、自分の生活に、自然界に、藝術作品に、其の魂を動かされ深き感動を生じ得ることは望ましいことである。子供が斯くの如くして感じた所のものを大膽に且自由に表現させる所の子供の繪畫、粘土細工、舞踊、劇、音楽などは子供の教育上頗る重要なものである。

兒童の生活感と藝術

子供は大人に比べて遙かに心が自由で現實に捉はれる所が少い。

その上發育盛りの潑刺たる生活力をもつてゐるので、之が自づと外に現はれて、走つたり躍つたり唄を歌つたり或は繪を描いたり粘土細工をしたりして楽しんでゐる。即ち子供の生活それ自身が非常に藝術的興奮に似たものである。卑俗な現實に捉はれず、彼等自身の澄んだ感覺で捉へた實相はそのまゝ藝術的な境地であり、それを彼等の純眞な感情に従つて表現する所自づと藝術的な表現となる。子供の繪には見えるものを描くといふよりも知つてゐるものが描かれ、又印象深かつたものは大きく目立つやうに描かれ、或は寫生的な表現をするよりも自分の感じを線の運びでそのまゝ現はしたりする事が特徴であるが、それ等は皆子供の生活感情が大人から見ても極めて藝術的であることに基く。それ故に子供の藝術的感情を養成するには何よりも先づ彼等自身の生活

を楽しませることが大切である。

然るに子供の生活領域即ち子供の知つて居る世界の廣さは子供の年齢によつて違ひ、たとへば幼少な時にはたゞ自分の家の中しか知らないのが生長するに隨つて次第に廣まり行くと同様に、生活實相を理解し感得する仕方即ち生活領域の深みも亦時代により年齢によつて違つてゐる。子供は幼い程自己と外界との境界が不明瞭である。極く幼い赤兒では自分の手と母親の手との區別もつかず、自分の身體と外物との境界も明瞭でない。稍大きくなつても夢と現實との區別は容易につかず、想像と實際との境界が不明瞭である、加之總てのものは生きて居るものも生命の無いものも自分と同じ心をもつと考へ、従つて同情の移行も甚だ容易である。前にも述べた如く、子供がいつまでもこのやうな状態に止つてゐるのは、精神發達の遲滯の證據であるが、併し子供の感情を豊富にし、常に鋭敏な感受性を以て實相に觸れ得るやうにならしめるには、餘り早くから興味索然たる忙がしい現實世界に接觸せしめる事なく、子供の夢想的藝術的な世界を十分樂しませることが大切である。さきにも述べた如く子供は自我心が強いから、自分の繪や粘土細工などを心なき大人が『之は奇妙だ、變だ』などと批評すると子供の藝術的な喜びは忽ち消失して動も

すると其の後の藝術的製作の熱を冷却してしまふことが多い。

表現は子供の大好きなものである。彼等の内に溢れ出る生命の力や躍り上る感情の波は之を何等かの形で外に表はさすには居られない。手振り身振り叫聲などの原始的藝術の主要な表現をなして居る所のもが子供の藝術の表現に於いても亦最も重要なものであり、さうする事によつて子供は無限の喜びを覚えるのである。音楽を聞いても芝居を見ても、おとなしくぢつとしてゐる事は出来ない。何等かの形で之を身體的にあらはさざるを得ないのである。藝術によつて子供を樂しませる時には特に斯かる點に注意せねばならぬ。それと同時に前に述べた藝術の共有性をも考へて、斯かる子供の表現を、子供に共通し得る或る型によらしめ、一人一人が勝手な表現をするのではなく、それを通じて他のものと共感し得る様な藝術的表現にさせるやうにする事は、教育者の大切な仕事である。之を要するに子供の藝術的感情を養成するには、子供に十分その生活を樂しませ、そこで捉へる實相に對する感激を、他の子供と共に樂しみ得るやうな藝術的表現によつてあらはすやうに導くのが其の主眼點である。

大人の藝術品と子供

子供の眞の藝術は子供自身の手から生れるものであるけれども、

發育中の子供は、大人に啓發され大人に助けられて、満足を感じ樂しみを味はふことも亦頗る大であるから、大人が子供の爲めに之に適當な藝術を作つて與へることも大切である。併しこの場合動もすると子供を樂しませ喜ばせるといふ方面のみが主になつて、子供を啓發する側が蔑ろにされ易い。子供を啓發しようとして作られた藝術は、子供にとつて面白くないことが少なくないから、子供は單に子供に媚びたやうな低級なものに走らうとする風になる。

此の事は一つには児童藝術殊に児童文學や児童映畫が現在一般の藝術家達に等閑にされて居り、低級な仕事の様に考へられてゐる爲めであらう。又今一つには児童のための文學や映畫を作る人々が子供の生活を深く味はず、随つて子供の眞の藝術感に觸れる様な作品を作り得ないのもよる。勿論我が國でも少數の偉大な児童藝術の作家が子供の生活の眞相を知つて一方には子供を喜ばし樂しませつゝ、他方にはその藝術的感情を養成し啓發して行つたことは確かであり、又かゝる人は現在にもあることは事實である。我々はこの上も尙は多くの斯くの如き藝術家の輩出せんことを望んで止まない。

偉大な藝術家が残した(大人のための)作品に觸れて、多少でも何等かの藝術的感動を感じ得

るのは青年期以後からである。この頃から子供は次第に大人の感じ方が多少づゝ分つて來、殊に藝術家の若々しい感激が強く青年男女の胸に訴へるやうになる。少年幼年の時代には大人の藝術作品のよい所を感得する事は殆んど出来ないが、併し此の時代から藝術的に香りの高い作品に多く觸れてゐると、たとへその時は殆んど之を感得することが出来なくとも、成長した後其の昔何の氣もなく覚えてゐたものや、觸れてゐた氣品が、内容をもつて甦つて來ることが多い。又自分に感得することが出来なくても、偉い人の作品の偉大なる所を實際について説明されると、何となく子供心にも敬虔な感じが起り、それが後年になつて藝術的な趣味の上に甦ることがある。さういふ副次的な意味で、子供の時から眞に立派な藝術作品に觸れさせることは相當に意義のあることである。

自然と子供の藝術感

前に述べた如く子供の生活感情と自然とは頗る密接な關係をもつてゐる。自然の懷に抱かれ自然の心の中に心ゆくまゝに遊びつゝ、そこに自然のよさと美しさをを感じるならば之は立派な藝術心である。畫家が描いた自然や詩人が歌つた自然よりも、子供が自分の目で見、自分の耳で聞いた自然の方が、遙かにみづ／＼しいものであることはいふまでもな

い。大人の表現を通して見る自然の美を、子供自身の感じ方に任せ、之を子供の表現で表はさしめたら、立派な美が成立する。前掲のゲーテの叙述の中には天才詩人が自らの目にふれた自然の妙味に感嘆した意味が多分に含められてゐる。子供にも自然そのものを見せ自然そのもの懐に生活させるならば、自ら美しい藝術的感情を培ひ得るであらう。

但し前にも述べた如く、子供の観察は大人に比すると極めて狭い範囲に限られ、従つて子供の心に映する自然は寧ろその小さい部分である。即ち鳥の巢、蟹、蟬、魚、草花等を中心とした小さい自然であるが、併しそれが又限りない自然の深みを子供に味はせしめる。大人からはつまらぬものに見える小さい自然物の中に、子供は驚異を感じ感激を得、それが子供にとつてはまぎれもない自然の實相なのである。都會から田舎へ来た或る女兒が茄子が枝に生つてゐるのを初めて見て心の底から感嘆した。それから數日間の子供の生活は『木に生つてゐる茄子』を中心に營まれ、逢ふ人ごとにその驚異を語り、島へ出ては茄子を観察し寫生し、友達への手紙に其のことを詳しく書いて送つた。この子供は數日間全く自分が新しく見出した自然の實相に伴ふ感情の表現にのみ精を出してゐたのである。之は一例に過ぎぬが、子供の生活をよく見てゐると之に類したことが

頗る多い。

近代文化と子供の藝術感

文化が進んで子供の周圍が便利となるにつれ、今の子供は昔の子供が自然にもつてゐた創作の喜びを奪はれるやうになつた。例へば今子供が舟を作らうと思へば、昔なら先づ木を切ることから始めて、何から何まで自分でしなければならなかつた。一艘の粗末な舟が出来るまでに、随分の勞力と時間を要したのであるが、その代り出来上つた時には心の中に限り無い創作の喜びを味はふ事が出来た。所が今日は玩具屋に行けばいくらでも立派な舟が容易く手にはいる。その代りに新しい舟を自分の力で作つた時の喜びを経験する機會を全くなくしてしまつた。すべて子供は何事も自分でなし、自分で作り、自分で表現することを限り無く喜ぶものであるのに、その自己活動や創作の樂しみが文化の發達によつて次第に減少するとは頗る不幸な事である。

併しながら其の半面に於いて文化の發達は又昔にはなかつた新しい藝術的な喜びを子供に與へるやうになつた。今の子供の最も喜ぶものは、汽關車、軍艦、飛行機など、近代科學の粹を集めたものである。近代科學の作り出した力強い集約的な美は、確かに次ぎの時代に生きんとする幼い子

供達の藝術的感情の一つの標準となりつゝある。子供は板で舟を作る喜びを味はふ機會を失つても、電氣を用ひ發動機を利用し、數人又は一學級共同して大規模な機械の模型を作り出す楽しみを新しく得た。一方に於いて失はれた創作の喜びを子供の心に蘇らす一つの方向を示唆してゐるものと思はれる。

近代文化が子供の藝術の上に齎した今一つの大切なものは映畫である。映畫はすべての藝術が初めにさうであつた如く、今や娛樂の時代から藝術へ轉向しようとしてゐる。之も今後次第に研究をつんで一方には子供の心を楽しませつゝ他方には教育的効果を狙ひ得る新しい一分野であると考へられる。

第十章 結 び

人間の生活の根底は本能にあり、感情も亦本能に伴ふものが最も重要である。子供は成長の途中にあるものであり、彼等にとつて最も大切なことは自己を完全にすることである。従つて子供の時には、自己を完全にするために必要な本能は十分に満足せしめられ、之に伴ふ感情は十分に強からしめられる事が最も大切である。感情は人間生活の燃料であつて、之が強くなければ事に當つて十分なる意志力を以て實行することが出来ない。子供の時に大切な本能的欲求や感情の満足を阻止された者は、生長して後に無氣力な意氣地なき人となり易い。

併し、人間の生活は多數の本能の協働に基くものであり、子供も亦同様に多くの本能を有し此等が一全體として纏つたものであり、而して此等多くの本能は互に相助け又は相反撥して、その場合場合に最も適應した行動を生ずるのである。この本能の協働は知的發達に伴つて漸次理性的な統制となり、感情生活も次第に本能から脱化して知的に洗練され、理性的な秩序を保持するやう

にならねばならぬ。而して知又は理性といふのは、感情の外にあつて之を統制する者ではなく、感情生活と知的活動との渾一な生活修練の中から出来てくるものである。それ故に子供の感情の教育は、知識を與へたり言葉で教育したりするのみでは達せられず、子供が實際やつて居る生活そのものの中に於いて之を鍛へて行かなければならぬ。

然るに大人の生活と子供の生活とはその間に大なる差違がある。即ち子供はその年齢に應じて自己特有の當然の欲求をもち自己の知力に相當した生活領域をもち自己特有の心の楽しみをもつて居り、此等は必ずしも大人に於けるものとは一致して居ない。大人がいゝと思ふことも子供にはよくない場合もあれば、大人から見ると奇怪なことも子供にとつては至極當然な場合もある。大人として扱はうとし、大人の作法・道徳理想をそのまゝ子供に強ひようとする。之が子供の感情に逆つてその子供を頗る偏つた性格にならしめる場合が少くない。子供は決して完全なものではなく、不完全なのが子供の本質であるから、その不完全な状態に適當なやうに取扱ひ教育して行かねばならぬ。

心身の發達に伴つて子供そのものが種々に變化し又その環境も時に應じて違つてくるから、子供の時の感情的統制が生長した後にもそのまゝ殘存するわけにはゆかない。子供の時に亂暴な騒々しい子が大きくなつて職務に勉勵する謹直靜肅な人になることもあり、又反對に子供の時におとなしい子が大きくなれば亂暴になることもある。大人は自分が扱ひよいやうにたゞおとなしく靜肅にするやうに子供を躰けたがるが、之、大なる誤りで、たとへ子供の時少々ぐらゐる取り扱ひにくゝても大きくなつて社會人類の一員として十分に働けるやうに元氣に充ちた活潑な人になるやうに育てねばならぬ。

併しながら子供の時分に其の生活の根底に於いて自然に鍛へられ或は習慣づけられた傾向は、大きくなつてもやはり残つて居て感情的態度の根底を流れる重要な力をなしてゐるものである。國民的感情とか、道徳的、宗教的、美的感情とかの如きそれである。勿論これらの感情の對象又はそのあらはれ方などは子供の年齢により又其の時の社會の状態などによつて異なるが、根本的な感情的動力は幼い時のまゝで残つて居るのである。従つてかゝる感情的動力を幼い時から適當に涵養することが最も大切である。

文化の進歩は人類に種々の幸福を齎したが、又之と同時に種々の害惡も亦發生した。文化の此

の利害の兩方面をよく考察して、文化の中に就いてその取るべきは取り避くべきは飽くまで之を避けねばならぬ。文化の美名に欺かれて一時の便宜や快樂の爲めに何によらず新しいものに盲目的に追従すると、動もすると感情の頹廢に陥り易い。『神は人を正しきものとして創り給ひしに人多くのたてを案出せしなり』といふ聖書の言葉は大いに味はねばならぬと思ふ。而して現代の子供の環境にはこれ等文化の中毒による害悪が頗る多い。子供の感情の訓練の一方には、此等の害悪から遠ざからしめることが極めて緊要なことである。

昭和十一年八月十六日印刷 兒童教育講座 【定價九十錢】
昭和十一年八月二十日發行 兒童の情操とその教育

著者 野上俊夫

發行者 西村豊吉
東京市麹町區九段四丁目八番地

印刷所 厚徳社印刷所
東京市小石川區高田豊川町三〇番地

發行所

東京市麹町區九段
四丁目八番地

叢文閣

振替東京四二八八九番
電話九段二五六八番

兒童教育講座

*第一卷	兒童心理……	東北帝國大學 心理學教授	大脇 義一 立花 祐雄
第二卷	兒童の智能……	廣島文理大學 文學博士	久保 良雄
第三卷	兒童の情操と その教育……	京都帝國大學 文學博士	野上 俊夫
*第四卷	青年心理……	東京帝國大學 助教授	青木 誠四郎
第五卷	農村の教育 都會の教育……	東京帝國大學 教育學研究室	細谷 俊夫
第六卷	兒童と社會生活……	東京府第一高 等科教授	鈴木 清
*第七卷	幼兒の教育……	東京理大 助教授	武政 太郎 中野 佐三
*第八卷	兒童と宗教教育……	東京文理科大學 心理學教授	高崎 能樹
*第九卷	新しき母の爲に……	東京府社會教育 主事	田中 令三
*第十卷	學業成績……	東京文理科大學 東京高等師範 文學博士	田中 寬一 丸山 良二
*第十一卷	學校教育の實際 と學校選擇の問題……	雙啞學校教諭 東京高等師範 文部省事務官 前高師附屬小學校 主事	日田 權一 山本 猛
*第十二卷	職業指導と 就職後の輔導……	東京府女子師範 倉敷勞働科學研究所 文學博士	桐原 葆見
*第十三卷	母の爲の 教育方法論……	日本女子大學 附屬小學校主事	河野 清丸
*第十四卷	治療教育學……	名古屋醫科大學 醫學博士	杉田 直樹
*第十五卷	兒童の榮養……	東京市榮養研究所 醫學博士 聖路加病院小兒科 醫學博士	藤卷 良知 齋藤 潔
*第十六卷	兒童の生理と保健……	恩賜財團愛育會 調查委員 醫學博士	廣瀬 興

(*印は既刊)

271
168

終